

# プログラマのための余代数

山崎利治

## 今日の話題

代数と余代数はともに集合と関数の組として定義される. 簡単に言えば, それらはつぎである.

$$\text{代数} \quad (X, FX \xrightarrow{a} X)$$

$$\text{余代数} \quad (X, X \xrightarrow{c} FX)$$

ここで  $X$  は集合,  $F$  は集合上の構成子あるいは分解子,  $a, c$  は関数である. プログラマになじみの

抽象データ型は代数

状態系は余代数

である. また, 自己参照を伴う無限の要素をもつデータ型やオブジェクト指向のオブジェクトも余代数とみなされる. 今日の話題はこの余代数である.

## 今日の話題

余代数に関連するいくつかの概念があり, この説明が目的である.

	代数	余代数
構造	$a : FX \rightarrow X$	$c : X \rightarrow FX$
意味	始代数	終余代数
定義・証明原理	合同関係	双模倣関係
	帰納法	余帰納法

## 話の予定

- I 余代数の例
- II グラフ, 圏, 関手
- III 余代数
- IV 双模倣関係と余帰納法

# I 余代数の例

# 状態系

余代数は状態系の理論である

状態系とは

- 系は一定の操作をもち
- 系の操作を通して環境と相互作用を行い
- 見えない内部状態に依存した挙動を示し
- 一般に停止しない

ものである．その例をつぎに挙げる．

## 暗箱

暗箱に二つの釦  $h, t$  と表示窓がある. 釦  $h$  を押すと文字を窓に表示する. 釦  $t$  を押すと状態が変わる. これはつぎのように表せる:

$$\begin{cases} h & : S \rightarrow A \\ t & : S \rightarrow S \end{cases}$$

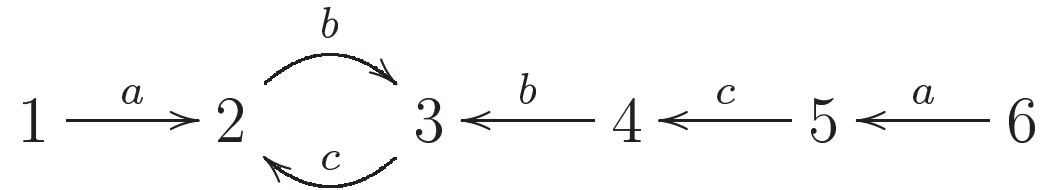
纏めてつぎのように表せる.

$$(S, \langle h, t \rangle : S \rightarrow A \times S)$$

ここで,  $S$  は状態集合,  $A$  は表示文字集合である.

## 暗箱

たとえば



$$(s \xrightarrow{a} s' \Leftrightarrow h(s) = a \wedge t(s) = s')$$

上の図で, 状態 1 と 6 は  $h$  釦を押しただけでは  $a$  を窓に観察して区別できないが  $t, h$  と釦を押すと一方は  $b$ , もう一方は  $c$  を観察し区別できる. 状態 2 と 4 は以降の挙動が全く同じで区別できない. 状態間の区別できないという関係 (**挙動同値**) を  $\sim$  と記せば

$$s \sim s' \Leftrightarrow h(s) = h(s') \wedge t(s) \sim t(s')$$

である.



# 有限オートマトン

有限オートマトンは順序回路や語句解析の思考道具として利用されてきた.

$I$  上の決定性有限オートマトン  $A = (I, S, s_0, F, \delta)$

$I$  : 入力文字集合

$S$  : 状態集合

$s_0$  : 始状態  $\in S$

$F$  : 終状態集合  $\subseteq S$

$\delta : S \times I \rightarrow S$  状態推移関数

## 有限オートマトン

$\delta : S \times I \rightarrow S$  をつぎのように拡張する.

$$\delta^* : S \times I^* \rightarrow S \quad (I^* \text{ は } I \text{ の文字の有限列集合})$$

ただし,  $\delta^*$  はつぎを満たす.

$$\delta^*(s, 1) = s \quad (1 \text{ は空列})$$

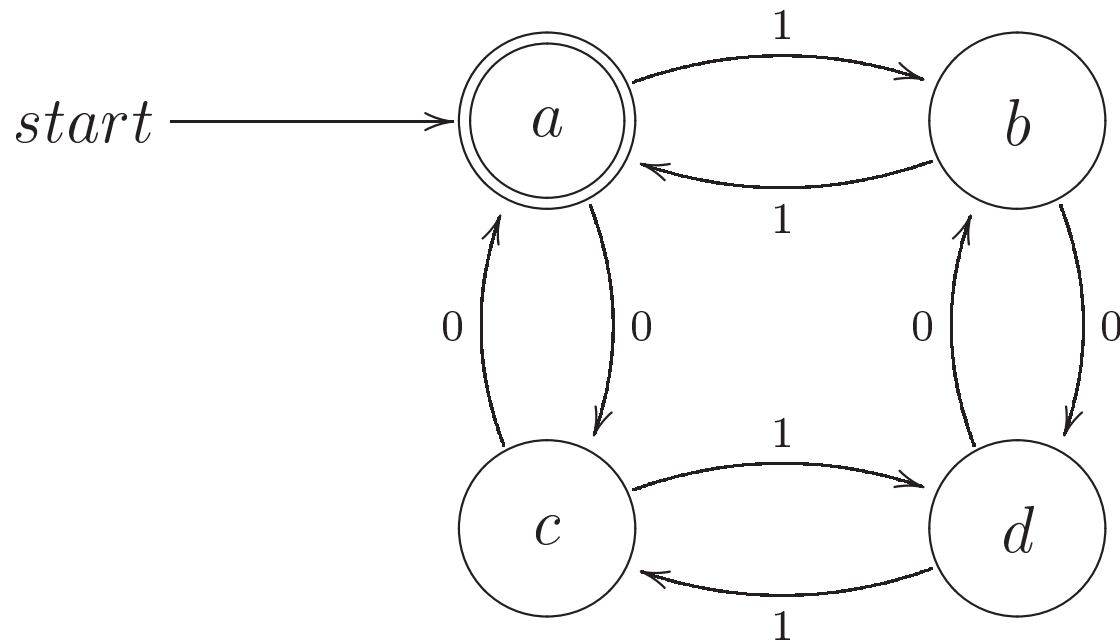
$$\delta^*(s, i) = \delta(s, i) \quad (i \in I)$$

$$\delta^*(\delta^*(s, \alpha), \beta) = \delta^*(s, \alpha\beta) \quad (\alpha, \beta \in I^*)$$

$A$  の認識言語  $L(A) \triangleq \{\alpha \in I^* \mid \delta^*(s_0, \alpha) \in F\}$

## 有限オートマトン

空列および出現文字をそれぞれ偶数個含む 0,1 有限列を認識する決定性有限オートマトン (二重丸は終状態)



$$\begin{aligned} & [ (1(00)^* + 0(11)^*10(00)^*)(01(11)^*10(00)^*)^*1 + 0(11)^*0 \\ & + (1(00)^* + 0(11)^*10(00)^*)(01(11)^*10(00)^*)^*01(11)^*0 ]^* \end{aligned}$$

## 有限オートマトン

決定性有限オートマトンの関数  $\delta : S \times I \rightarrow S$  を  $\delta' : S \rightarrow S^I$  ( $\delta'(s) \triangleq \delta(s, -) : I \rightarrow S$ ) と考える.  
決定性有限オートマトンはつぎのように表せる.

$$(S, \alpha : S \rightarrow S^I \times \mathbb{B})$$

$\mathbb{B} = \{true, false\}$  は終状態を判定するために用いた  $(\langle \delta', final \rangle : S \rightarrow S^I \times \mathbb{B})$ .

## 札付推移系

札付推移系は並行プロセスのモデルとして利用されている。

札付推移系は  $(S, L, T, s_0 \in S)$  である。ここで

$S$  : 状態集合

$L$  : 札集合

$T$  : 推移関係  $\subseteq S \times L \times S$

$s_0$  : 始状態  $\in S$

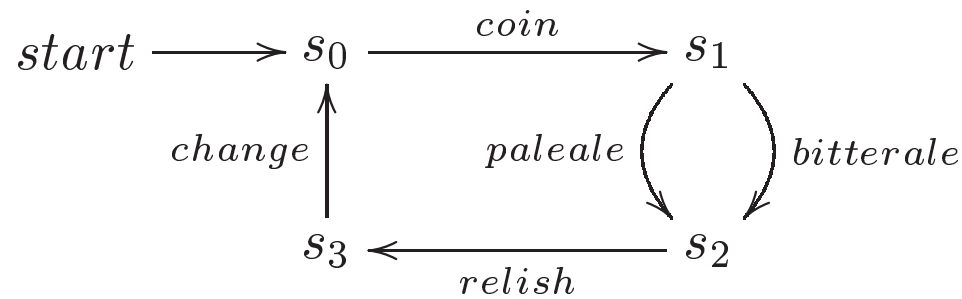
$(s, l, s') \in T$  を  $s \xrightarrow{l} s'$  と記す。

## 札付推移系

例  $S = \{s_0, s_1, s_2, s_3\}$ ,  $L = \{coin, paleale, bitterale, relish, change\}$

$T =$

$\{(s_0, coin, s_1), (s_1, paleale, s_2), (s_1, bitterale, s_2), (s_2, relish, s_3), (s_3, change, s_0)\}$



# 札付推移系

札付推移系は纏めると

$$(S, \gamma : S \rightarrow \mathbb{P}(L \times S))$$

関係  $T$  を  $S \rightarrow \mathbb{P}(L \times S)$  ( $\mathbb{P}X$  は  $X$  の巾集合) と関数に変更した.

## Kripke 枠と Kripke 模型

Kripke 枠は様相論理の模型のための構造である.

### Kripke 枠

$(W, R)$  ここで

$W$  : 可能世界集合

$R$  : 可達関係  $\subseteq W \times W$

### Kripke 模型

$(W, R, V)$  ここで

$A$  : 素命題集合  $\ni a, b, \dots$

$V$  : 付値  $A \rightarrow \mathbb{P}W$  ( $\mathbb{P}W$  は  $W$  の巾集合)



# Kripke 枠と Kripke 模型

様相論理 命題論理につきを追加

$\Box p \cdots$  必然的に  $p$  である

$\Diamond p \cdots$   $p$  である可能性がある

## 構文

$a$  を素命題,  $p, q$  を様相論理式 (その全体を  $F$ ) とする.

$$p, q ::= a \mid p \wedge q \mid \neg p \mid \Box p$$

## 意味

与えられた Kripke 模型  $(W, R, V)$  に対して世界と様相論理式の関係  $\models$  をつぎのように定める. ( $w \models p \cdots$   $p$  は  $w$  で妥当,  $w$  は  $p$  を充足する)

$p, q \in F, w \in W$  に対して

$$w \models a \Leftrightarrow w \in V(a)$$

$$w \models p \wedge q \Leftrightarrow w \models p \text{ かつ } w \models q$$

$$w \models \neg p \Leftrightarrow w \not\models p \text{ ではない}$$

$$w \models \Box p \Leftrightarrow w R w' \text{ となるすべての } w' \text{ に対して } w' \models p$$

## Kripke 枠と Kripke 模型

たとえば,

$$W \triangleq \{a, b, c\}$$



1)  $(W, R)$  で  $\Box p \Rightarrow p$  は恒真

2)  $(W, R)$  で  $\Box p \Rightarrow \Box\Box p$  は偽

2)  $\models$  を

$$a \models p, \quad b \models p, \quad c \not\models p$$

とすれば,  $aRy$  となるのは  $y = a \vee y = b$ . いずれの場合にも  $y \models p$  ゆえに

$a \models \Box p$ . かつ  $bRc \wedge c \not\models p$  ゆえに  $b \not\models \Box p$ . また  $aRb$  だから  $a \not\models \Box\Box p$ . したがって  $a \not\models \Box p \Rightarrow \Box\Box p$ .

## Kripke 枠と Kripke 模型

Kripke 模型は纏めると

$$(W, \gamma : W \rightarrow \mathbb{P}(A \times W))$$

これは札付推移系に他ならない。

## OOP のオブジェクト

つぎの Java のクラス宣言も余代数とみなせる.

```
//class Bank_Account declaration
class BAcnt{
  private int amt;  //field-declaration
  BAcnt(){ amt=0; }  // constructor-declaration
  //method-declarations
  public void deposit(int n){ amt += n; }
  public show(){ return amt }
}
```

## OOP のオブジェクト

- amt は非公開
- 仕様としてはつぎをいいたい:  
`x.deposit(m).deposit(n).show()==x.deposit(m+n).show()`  
つぎはいいたくない:  
`x.deposit(m).deposit(n)==x.deposit(m+n)`

オブジェクトは纏めると

$$(S, \langle show(), deposit(n) \rangle : S \rightarrow \mathbb{Z} \times S^{\mathbb{Z}})$$

## 無限列

Haskell など遅延評価を行う関数型プログラムでは流 (stream) というある型のデータの無限列が扱える.

```
data IS = Cons Int IS
h :: IS -> Int
h (Cons n s) = n
t :: IS -> IS
t (Cons n s) = s
seq :: Int -> Int -> IS
seq n m = Cons n (seq (n+m) m)
-- seq 0 1 == 0,1,2,...
```

## 無限列

このデータ型無限列  $IS$  はつぎのように表せる.

$$IS = (IS, \langle h, t \rangle : IS \rightarrow \mathbb{Z} \times IS)$$

## II グラフ, 圏, 関手

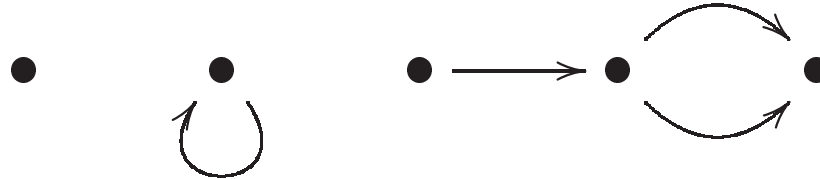


# グラフ

グラフ (有向多重グラフ)  $(E, V, s, t)$

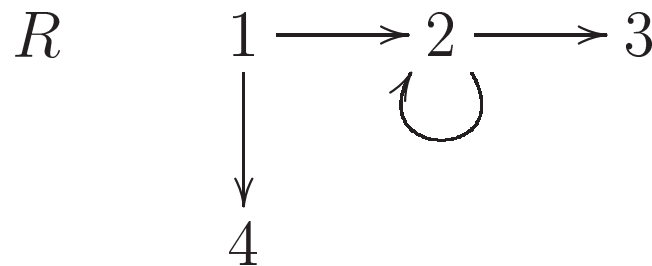
$E$  : 辺,  $V$  点,  $s : E \rightarrow V, t : E \rightarrow V$  辺の始点, 終点を示す関数

例 有限グラフ (辺も点も有限個) は  $\bullet$  と  $\rightarrow$  によって図示できる.



例 集合上の関係

$A \triangleq \{1, 2, 3\}, B \triangleq \{2, 3, 4\}, R \triangleq \{(1, 2), (2, 2), (2, 3), (1, 4)\}$



## グラフ射

$G_1, G_2$  : **グラフグラフ射**  $g : G_1 \rightarrow G_2$  とはつぎのような射  
 $g = (g_E, g_V)$  のこと

$$\begin{array}{ccc}
 E_{G_1} & \xrightarrow{s_{G_1}} & V_{G_1} \\
 \downarrow g_E & & \downarrow g_V \\
 E_{G_2} & \xrightarrow{s_{G_2}} & V_{G_2}
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{ccc}
 E_{G_1} & \xrightarrow{t_{G_1}} & V_{G_1} \\
 \downarrow g_E & & \downarrow g_V \\
 E_{G_2} & \xrightarrow{t_{G_2}} & V_{G_2}
 \end{array}$$

例 任意のグラフ  $G$  からグラフ  $H : v \overset{e}{\curvearrowright}$  へのグラフ射  $g$  が存在する  
 ( $G$  の点を  $v$  に, 辺を  $e$  に対応させればよい).

## 圏

グラフ  $\mathbb{C}$  がつぎをみたすとき **圏** という. この場合点を **対象**, 辺を **射**, 辺の始点を **域**, 終点を **余域** という.

- 各対象  $A$  にはそれを域, 余域とする射 (恒等射)  $1_A$  がある.
- $A \xrightarrow{f} B \xrightarrow{g} C$  の状況の二つの射  $f, g$  に対してその合成射  $g \circ f : A \rightarrow C$  が存在する.
- $A \xrightarrow{f} B$  のとき  $f \circ 1_A = f = 1_B \circ f$
- 合成射についてつぎが成立する.  $h \circ (g \circ f) = (h \circ g) \circ f$

圏  $\mathbb{C}$  の対象全体を  $Ob(\mathbb{C})$ , その射全体を  $Mor(\mathbb{C})$  と記し, また域, 余域を  $A, B$  とする射の全体を  $\mathbb{C}(A, B)$  と記す. 考える圏は小さい ( $Ob(\mathbb{C})$  も  $Mor(\mathbb{C})$  も集合) とする.

## 圏

例  $Mon$  単一対象と任意の数の射がつくる圏 (単位半群)

$Set, Set_f$  集合を対象, それらの上の関数を射とする圏, 後者は有限集合

$Pnf$  集合を対象, それらの上の部分関数を射とする圏

$Has$  Haskell の型を対象, 関数を射とする圏

$Grf$  グラフを対象, グラフ射を射とする圏



## 圏 $\mathbb{C}$ の余圏 $\mathbb{C}^{op}$

1.  $Ob(\mathbb{C}^{op}) = Ob(\mathbb{C})$

2.  $\mathbb{C}^{op}(B, A) = \mathbb{C}(A, B) \quad (*)$

$(*)$  は  $f : A \rightarrow B$  ( $f \in \mathbb{C}(A, B)$ ) に対して

$f^{op} : B \rightarrow A$  ( $f^{op} \in \mathbb{C}^{op}(B, A)$ ) が 1 対 1 に対応し, かつ,

$$A \begin{array}{c} \xrightarrow{f} \\ \xleftarrow{f^{op}} \end{array} B \begin{array}{c} \xrightarrow{g} \\ \xleftarrow{g^{op}} \end{array} C$$

$$(g \circ f)^{op} = f^{op} \circ g^{op}$$

を意味する. またとくに

$$(1_A)^{op} = 1_A$$

## 圏

### 圏 $\mathcal{C}$ における双対性

$\mathcal{C}$  で成立する性質  $P$  に対してそこに現れる射の向きを逆にしてえられる性質を  $P^{op}$  を  $P$  の**双対性質**という. 一般の圏においてつぎの**双対原理**が成立つ.

圏  $\mathcal{C}$  において, ある命題  $P$  が成立てば,  
その双対命題  $P^{op}$  も成立つ.

## 始対象と終対象

圏  $\mathbb{C}$  の対象  $I$  が始対象  $\Rightarrow$

$$\forall A \in \mathbb{C} \exists! g_A : I \rightarrow A$$

つまり,  $\mathbb{C}(I, A) = \{g_A\}$

圏  $\mathbb{C}$  の対象  $T$  が終対象  $\Rightarrow$

$$\forall A \in \mathbb{C} \exists! f_A : A \rightarrow T$$

つまり,  $\mathbb{C}(A, T) = \{f_A\}$

Set では空集合が始対象である.

Set では単集合  $\{*\}$  が終対象である.

$\exists! f$  は「 $f$  が一意的に存在する」と読む.

## 関手

$\mathbb{C}, \mathbb{D}$  を圏とする.  $\mathbb{C}$  から  $\mathbb{D}$  への (共変) 関手  $F : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{D}$  とはつぎを満たすグラフ射のことである.

- $F(g \circ f) = F(g) \circ F(f)$
- $F(1_A) = 1_{F(A)}$



# 関手

例

恒等関手  $Id : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$

$$f : C \rightarrow C' \mapsto f : C \rightarrow C'$$

定数関手  $K_D : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{D}$

$$f : C \rightarrow C' \mapsto 1_D : D \rightarrow D$$

Haskell の型構成子 e.g. `[]`(List)

# 関手

例

(共変) 巾関手  $\mathbb{P}(\_) : Set \rightarrow Set$

$$S \xrightarrow{f} S' \mapsto \mathbb{P}S \xrightarrow{\mathbb{P}f} \mathbb{P}S' : S \supseteq T \mapsto f(T) \subseteq S'$$

上はつぎを満たす.  $\mathbb{P}1_S = 1_{\mathbb{P}S}$ ,  $\mathbb{P}(g \circ f) = \mathbb{P}g \circ \mathbb{P}f$

(共変) 有限巾関手  $\mathbb{P}_f(\_) : Set \rightarrow Set$

合成関手  $\mathbb{C} \xrightarrow{F} D \xrightarrow{G} E$  に対して  $\mathbb{C} \xrightarrow{G \circ F} E : G \circ F(C) \triangleq G(F(C))$

積関手  $F, G : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{D}$  に対して  $F \times G : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{D}$  をつぎのように定義する ( $\mathbb{D}$  は積をもつとする).

$$C \xrightarrow{f} C' \mapsto FC \times GC \xrightarrow{Ff \times Gf} FC' \times GC'$$

余積関手も同様に定義する.

## 関手

**多項式関手** 自己関手で恒等関手, 定数関手, 積関手, 余積関手, それらの合成による関手  $((_)^A : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C} : X \mapsto X^A$  ( $A$  を集合として) を含めることがある).



## 余代数

# 代数と余代数

以下  $\mathbb{C}$  は圏,  $F : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$  は関手,  $A, A', C, C' \in \mathbb{C}, \alpha, \gamma \in Mor \mathbb{C}$  とする.

$(A, \alpha : FA \rightarrow A) : F$  代数

$f : (A, \alpha) \rightarrow (A', \alpha') : F$  代数射はつぎ  
を可換にする射:

$$\begin{array}{ccc} FA & \xrightarrow{Ff} & FA' \\ \alpha \downarrow & & \downarrow \alpha' \\ A & \xrightarrow{f} & A' \end{array}$$

代数と代数射とは圏  $Alg(\mathbb{C}, F)$  をつくる

$(C, \gamma : C \rightarrow FC) : F$  余代数

$g : (C, \gamma) \rightarrow (C', \gamma') : F$  余代数射はつぎ  
を可換にする射:

$$\begin{array}{ccc} C & \xrightarrow{g} & C' \\ \gamma \downarrow & & \downarrow \gamma' \\ FC & \xrightarrow{Fg} & FC' \end{array}$$

余代数と余代数射とは圏  $Coalg(\mathbb{C}, F)$  を  
つくる.

$\mathbb{C}, F$  が明白であるときはそれを省略する.

# 代数と余代数

## 注意

- 恒等射は余代数射
- 余代数射の合成は余代数射
- 考える圏は多くは  $Set$  または  $Set_f$
- 考える関手は多くは多項式関手か  $\mathbb{P}_f$

## 余代数

データ型 IS は  $Set$  上の自己関手  $F(\_) = K_{\mathbb{N}} \times Id(\_)$  に対する余代数である .

## 終余代数

ある圏  $\mathbb{C}$ , その上の自己関手  $F$  に対する圏  $Coalg(\mathbb{C}, F)$  には終対象, すなわち, 終余代数が存在する.

- ★ 多項式関手  $F$  に対する  $Coalg(Set, F)$  には終余代数が存在する.
- ★ 巾関手に対する  $Coalg(Set, \mathbb{P})$  には終余代数が存在しない.
- ★ 有限巾関手に対する  $Coalg(Set, \mathbb{P}_{fin})$  には終余代数が存在する.



## 終余代数

★ 終余代数はすべて同型である.

★ 終余代数の構造射は全単射 (同型余代数射) である.

$$\begin{array}{ccccc} C & \xrightarrow{\gamma} & FC & \xrightarrow{!} & C \\ \gamma \downarrow & & \downarrow F\gamma & & \downarrow \gamma \\ FC & \xrightarrow{F\gamma} & FFC & \xrightarrow{F!} & FC \end{array}$$

$$! : (FC, F\gamma) \rightarrow (C, \gamma) \quad ! \circ \gamma = 1_C \quad \gamma \circ ! = 1_{FC}$$

## 射の分解

$Set$  では写像  $f : A \rightarrow B$  がつぎのように分解できる ( $m, e$  はそれぞれ単射, 全射) .

$$A \xrightarrow{m} C \xrightarrow{e} B$$

## 部分対象と商対象

$A, B \in \mathbb{C}$        $e, m$  はそれぞれ全射, 単射

$(A, m)$  が  $B$  の部分対象  $\Rightarrow$

$$A \rightrightarrows^m B$$

$(e, B)$  が  $A$  の商対象  $\Rightarrow$

$$A \twoheadrightarrow^e B$$

## 部分余代数と商余代数

$Set$  の場合, 余代数  $(B, \beta)$  で単射  $\alpha : A \rightarrow B$  は余代数射になる. すなわち,  $(A, \alpha)$  は部分余代数になる.

$Set$  の場合, 余代数  $(A, \alpha)$  上の合同関係  $\sim$  に対して, 標準射  $a : A \rightarrow A/\sim$  が余代数射になる. また, つぎを可換にする射  $\alpha^*$  が一意に存在し, すなわち,  $(A/\sim, \alpha^*)$  は商余代数になる.

$$\begin{array}{ccc} A & \xrightarrow{a} & A/\sim \\ \alpha \downarrow & & \downarrow \exists! \alpha^* \\ FA & \xrightarrow{Fa} & F(A/\sim) \end{array}$$

# IV

## 双模倣関係と余帰納法

# 双模倣関係

## 起源

- 様相論理 (van Benthem)
- プロセス代数 (Milner, Park)
- 非正則集合 (Aczel)

## 双模倣関係

### 動機

プロセスの同値性に関する議論である. プロセスを札付推移系  $(S, \xrightarrow{l} \subseteq S \times L \times S)$  と見做し, プロセス  $S$  の状態  $s$  と  $T$  の状態  $t$  についてつぎのような関係  $R \subseteq S \times T$  を双模倣的といった.

1.  $sRt$

2.  $\forall l \forall s' \bullet s \xrightarrow{l} s' \Rightarrow \exists t' \bullet t \xrightarrow{l} t'$

3.  $\forall l \forall t' \bullet t \xrightarrow{l} t' \Rightarrow \exists s' \bullet s \xrightarrow{l} s'$

$$\begin{array}{ccc} s & \xrightarrow{R} & t \\ \downarrow l & & \downarrow l \\ \forall s' & \xrightarrow{R} & \exists t' \end{array}$$

$$\begin{array}{ccc} s & \xrightarrow{R} & t \\ \downarrow l & & \downarrow l \\ \exists s' & \xrightarrow{R} & \forall t' \end{array}$$

## 挙動同値と双模倣関係

$C, D$  を  $F$  余代数とする.  $c \in C, d \in D$  に対して  
 $c \sim d$  (挙動同値) とは,  $F$  余代数  $E$  と余代数射  
 $f : C \rightarrow E, g : D \rightarrow E$  が存在して  $f(c) = g(d)$  となること.

同上の状況において

$B \subseteq C \times D$  が双模倣関係とは,  $F$  余代数  $\beta : B \rightarrow FB$  が存在して射影  $\pi_1 : B \rightarrow C, \pi_2 : B \rightarrow D$  が余代数射になること.

$$\begin{array}{ccccc} C & \xleftarrow{\pi_1} & B & \xrightarrow{\pi_2} & D \\ \gamma \downarrow & & \downarrow \beta & & \downarrow \delta \\ FC & \xleftarrow{F\pi_1} & FB & \xrightarrow{F\pi_2} & FD \end{array}$$

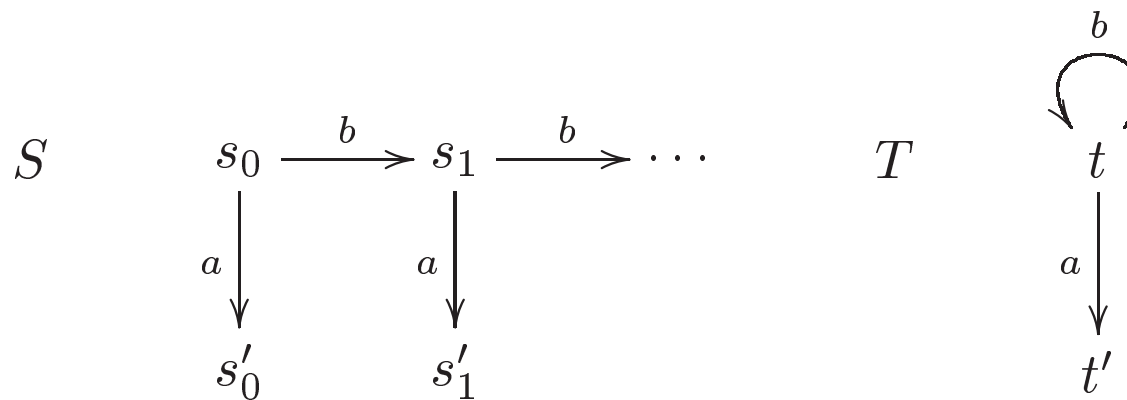


## 挙動同値と双模倣関係

- ★ 余代数  $(C, \gamma)$  上の対角関係  $\Delta_C \triangleq \{(c, c) \mid c \in C\}$  は双模倣関係.
- ★ 双模倣関係の逆関係は双模倣関係.
- ★ 双模倣関係の合併は双模倣関係.
- ★ 双模倣関係の合成は双模倣関係.
- ★ 最大双模倣関係が存在し, それを双模倣性という.

## 双模倣関係

その例 札付推移系  $S, T$



$$R \subseteq S \times S \quad R = \{(s_i, s_j) | i, j \geq 0\} \cup \{(s'_i, s'_j) | i, j \geq 0\}$$

$$R' \subseteq S \times T \quad R' = \{(s_i, t) | i \geq 0\} \cup \{(s'_i, t') | i \geq 0\}$$

$$f : S \rightarrow T : f(s_i) = t, f(s'_i) = t' \text{ 余代数射}$$

## 単純, 外延的

$F$  余代数  $C$  が**単純**とは, 任意の  $c, c' \in C$  に対して  $c \sim c'$  ならば  $c = c'$  が成立するときという.

$F$  余代数  $C$  が**外延的**とは, 任意の  $F$  余代数  $D$  に対して  $\forall d \in D \exists c \in C \bullet c \sim d$  が成立するときという.

単純とは余帰納法証明原理を満たすこと, つまり,  $c = c'$  を証明するためには  $c \sim c'$  を示せば十分であることである.

外延的とは  $F$  に関するすべての可能な挙動を惹き起こすことである.

## 単純, 外延的

- ★ 拳動同値関係による商余代数は単純である.
- ★ 任意の余代数からの余代数射をもつ余代数は外延的である.

## 終余代数

$F$  余代数  $(C, \gamma)$  が単純かつ外延的  $\iff (C, \gamma)$  は終余代数

終余代数  $(C, \gamma)$  の構造射  $\gamma : C \rightarrow FC$  は全単 (同型) 射である (Lambek).

## 終余代数

★  $Coalg(Set, K_A \times Id)$  においてつぎは終余代数.

$(A^\omega, \langle h \times t \rangle : A^\omega \rightarrow A \times A^\omega)$  ( $A^\omega$  は  $A$  上の無限列)

$\therefore$  任意の  $F$  余代数  $(S, \langle hd, tl \rangle : S \rightarrow A \times S)$  に対して  
 $(A^\omega, \langle h \times t \rangle : A^\omega \rightarrow A \times A^\omega)$  への余代数射  $\phi$  が一意に存在する .

$$\begin{array}{ccc}
 S & \xrightarrow{\phi} & A^\omega \\
 \langle hd, tl \rangle \downarrow & & \downarrow \langle h, t \rangle \\
 A \times S & \xrightarrow{(K_A \times Id)\phi} & A \times A^\omega
 \end{array}$$

$(K_A \times Id)\phi = 1_A \times \phi$  だから,  $\forall s \in S \quad h(\phi(s)) = hd(s) \quad t(\phi(s)) = \phi(tl(s))$  をい  
 えば  $\phi$  は余代数射になる. また帰納法によって, つぎが示せる.

$$\forall k \in \mathbb{N} \bullet t^k(\phi(a)) = \phi(tl^k(s)) \quad h(\phi(tl^k(s))) = h(t^k(s))$$

これは余代数射の存在と一意性を示す .

## 終余代数

★  $\text{Coalg}(\text{Set}, \text{Id} \times K_A \times \text{Id})$  においてつぎは終余代数.  
A の要素を節の札とする無限木

★  $\text{Coalg}(\text{Set}, \text{Id}^{K_A} \times K_{\mathbb{B}})$  においてつぎは終余代数.  
A 上の言語の余代数  $(\mathbb{P}A^*, \gamma : \mathbb{P}A^* \rightarrow (\mathbb{P}A)^A \times \mathbb{B})$

ただし,

$$\pi_1 \circ \gamma(L) = Le = \{w \in A^* \mid ew \in L\}$$

$$\pi_2 \circ \gamma(L) = \text{true} \text{ if } e \in L$$

## 問題

```
zip :: IS -> IS -> IS
```

```
zip s1 s2 = Cons (h s1) (zip s2 (t s1))
```

```
nat = seq 0 1
```

```
even = seq 0 2
```

```
odd = seq 1 2
```

```
nat == zip even odd を証明せよ
```



## 問題 (余帰納法による証明)

IS 上の双模倣は 2 項関係  $R \subseteq IS \times IS$  でつぎを満たすものである.

$$sRs' \Rightarrow h(s) = h(s') \wedge t(s) R t(s')$$

余帰納法による証明のために `nat` と `zip even odd` の間の双模倣を見出す必要がある. つぎがそうである.

$$R \triangleq \{(seq\ k\ 1, zip\ (seq\ k\ 2)\ (seq\ (k+1)\ 2)) \mid k \in \mathbb{N}\}$$

$k \in n$  として, まずつぎがわかる.

$$h(seq\ k\ 1) = k = h(zip\ (seq\ k\ 2)\ (seq\ (k+1)\ 2))$$

## 問題 (余帰納法による証明)

つぎに

$$t(seq\ k\ 1) \ R\ t(zip\ (seq\ k\ 2)\ (seq\ (k+1)\ 2))$$

はつぎからわかる.

$$t(seq\ k\ 1) = seq\ (k+1)\ 1$$

$$t(zip\ (seq\ k\ 2)\ (seq\ (k+1)\ 2))$$

$$= zip\ (seq\ (k+1)\ 2)\ (t(seq\ k\ 2))$$

$$= zip\ (seq\ (k+1)\ 2)\ ((seq\ (k+2)\ 2))$$

## 問題 (帰納法による証明)

自然数集合  $\mathbb{N}$  上の帰納法によってつぎの二つの補題を証明する.

- $\forall n \in \mathbb{N} \bullet t^n(\text{nat}) = \text{seq } n \ 1$
- $\forall n \in \mathbb{N} \bullet t^n(\text{zip even odd})$   
 $\quad = \text{zip } (\text{seq } n \ 2)(\text{seq } (n + 1) \ 2)$

以上からつぎがえられる.

- $\forall n \in \mathbb{N} \bullet h(t^n(\text{nat}) = h(t^n \text{ zip even odd}))$

つぎを認めれば証明ができる.

$$\text{ext} \quad [\forall n \in \mathbb{N} \bullet h(t^n(s)) = h(t^n(s'))] \Rightarrow s = s'$$

## 参考文献

- ★ R.Backhouse, et al.(eds.), Algebraic and coalgebraic methods in the mathematics of program construction. LNCS 2297, Springer, 2002.
- ★ J.Barwise and L.Moss, Vicious circle. CSLI, 1996.
- ★ R.Milner, Communication and concurrency. Prentice Hall, 1989.